

---

# ほーらトン

アマゾン滝沼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ほーらトン

### 【著者名】

N 1 1 9 3 M

【作者名】  
アマゾン滝沼

### 【あらすじ】

夢を追う、少年はいつも輝かしい。

(前書き)

どちらかと言えば「詩」かな?  
・・・と、思いましたが大丈夫で  
す。

## ホーラトン

ナシナシはいつものように大きな岩山へと向かった。空は快晴で、道中の面倒臭い山道もこの日ばかりは気分よくこなすことができた。ナシナシは浮かれていた。今日はツキが良く、学校でもカンテマの中でも、皆から尊敬の眼差しで見られたからだ。体調もすこぶる好調で、今日は何が起きても自分はそつなくこなせるという自信も漲っていた。

いつもの地点に到達すると、バックからピッケルとハンマーを取り出して岩肌を削りだした。彼の趣味は化石の発掘で、今までに幾つもの化石を掘り出している。

貝や海草・嶺虫など、多種類の化石を掘り出している。中でも彼にとって最高の一品は大きな牙の化石だ。なぜコレが最高の一品なのかといふと、これが太古の海で最大の生物であったホーラトンの物だからだ。

ホーラトンの全身の化石はまだ見つかってはいないが、その全長は約110M程あつたと推測されている。110Mということは大体ナシナシの通っている学校の横幅と同じくらいだ。そんな大怪物がかつての海にいたと想像するだけで、ナシナシの鼓動は激しく高鳴つた。

彼は毎晩毎晩寝る前にこの牙の化石を眺めながら、太古の世界に夢を馳せていた。そしてその度に彼は、いつかホーラトンの他の化石も探し出すという決意を固めていった。

日が沈みだして空が赤味を帯び始めた。そろそろ帰らなければならぬ時間だが、ナシナシは一心不乱に発掘を続けていた。そもそも彼は日が沈み始めたことにすら気づいていない。休憩も無しに彫り続けていた為、全身を強い疲労感が襲っていたが、彼はそんなコトなど気にも止めずにハンマーを振るつた。

何度も繰り返される打撃に岩肌は削れ、飛び散つていく。手が削り砂に汚れ、頬を散つた岩の欠片が掠めても、ナシナシはあきらめない。

体中が黄金に輝いているかのように、彼は満ちてゆくエネルギーを感じていた。それが湧き上がる無限ではなく、湧き上がる自分であるとしても、それに気がついても、ナシナシはあきらめない。

日が沈んで、何もかもが見えない黒い色の中で、ナシナシは目前のそれを碎き続けた。

今日はなんだか調子が良い。運が調子良いのだと、ナシナシは自分の両手に言い聞かせた。あきらめて、ダメってなんかいられない。どこどこまでも続く雲海を口で頬張つていくように、彼は果てしない時代に挑んだ。

誰もいなくとも、たとえその場に1人だとしても。ナシナシはナシナシである。

彼には夢がある。彼の宝物は大きな牙の化石。

だれも遡る事の無い時代が、今日のナシナシにとっては下りの坂道に見える。

坂道に気をつけて、急ぐと転げて落ちてしまう。

ビニビニまでも転がる果てには自分がいるのであろうか。ナシナシはそんなことを考えたのであろうか。

1億色の虹が流れる河のように、時は落ちていく。ナシナシも一つの虹で、だからこそ落ちていく。

狼や猿がナシナシの右を凄まじいスピードで過ぎ去り。人々なんかもう見えなくて、火なんかもう見えなかつたり。

だからといって彼が止まる術はないのだが、それでもいいのかもしれない。

止まるる場所があるからナシナシは大きな声で叫んでしまうのだら。

僕はここだ、ここにいる。ビニの時代でもない、ただ、ここにいるんだ

いつまでも子供ではない大人のよう、「ここにいるんだ

あきらめることを知らず、黄金のナシナシは落下していく。  
時間と空間の間に挟まる存在が何としても、意味なんて無い。

君が君であり、ナシナシがナシナシであつたとしても、牙の化石  
は宝物だと嬉しい。

だつて、『うんよもつと下、もつと右。

今だつてそつわ。ナシナシは黄金色に輝いている。

そこにあるのはナシナシだから。そこにあるのは一つの黄金エネ  
ルギーだから……。

ホーラーンは『うじだ、うじうじこる。ビリの時代でもない、ただ、  
うじにいるんだ

一日のうち、一度田の朝がナシナシを照らした。ワナを堪能した  
直後のように、ナシナシは倒れている。その、ナシナシを、一度田  
の朝日は照らした。

右手にハンマー、左手に牙の化石。譲れないことだけはしつかり  
と握り締めて、ナシナシはそこに横たわっている。顔にかかった砂  
の粒は田に照らされ、反射し、黄金に輝く。砂まみれのナシナシに  
田は反射し、黄金に輝くのを。

吹く風が右にあって、ナシナシの体を撫でて過ぎ去っていく。耳  
元で聞こえる風の音はいつも違つて、それは言葉がてきてから今ま

での言葉全部を合わせた数よりも多く。

誰よりもナシナシはハンマーを振るい、そして黄金色に輝いた。  
誰よりも、何よりも真剣に・・・。

時は流れて

遙か太古の昔、ナシナシといつ化石掘りがいたそうだ。それは一心不乱にハンマーを振るつて、夢の牙を左手に岩場を掘り進んだ。止まる事も知らず、あきらめることも知らずに、彼は岩場を掘り進んだそうだ。

日が沈みだして空が赤味を帯び始めた。そろそろ帰らなければならない時間だが、ハンマーは一心不乱に振るわれ続ける。休むことも知らず、いたって真剣に。

日が落ちても、ハンマーは一心不乱に彫り進められていく。彫り続けなければ左手の夢は叶わないから、掘り進んでいく。体は金色に輝くかのようにエネルギーが満ちている。かつてそうであったように、今もそうであるように、エネルギーは満ちている。

日が沈んでも、ハンマーは振るわれている。今日は運の調子が良いから。

ホーラントンは、すぐそここいるか

(後書き)

読んでいただき、誠にありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1193m/>

---

ほーらトン

2010年12月10日14時35分発行